
ドラゴンクエスト? ～天空の花嫁～

アメツチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンクエスト？ ～天空の花嫁～

【Nコード】

N7449X

【作者名】

アメツチ

【あらすじ】

愛する者を救うため――父、子、そして孫の三代に渡って受け継がれる強き意志の物語。天空に導かれた者たちの冒険が今、始まる。同名タイトルの名作RPGをたどる二次創作です。他サイトで公開中の作品を転載。オリジナル要素控えめ、原作に沿ったストーリー展開にしています。

1・誕生

——松明が静かに燃えている。

——豪奢で毛先の深い絨毯を踏みしめる感覚がいつもと違う。

「さあ陛下。こちらでございます」

「うむ。本当に苦勞をかけたな。礼を言うぞ」

実直で、かつ強靱な意志を感じさせる瞳を柔らかに細めながら、深紅のマントに身を包んだ男は給仕の女を労った。上品な微笑みを浮かべた初老の女は、そのまましとやかに腰を折り、男を先導して歩き出す。

——本当は駆け出したかった。一分一秒でも早く愛する者の元へと向かいたい。

だが男は逸る気持ちをぐっと抑えた。大柄な自分が走ればそれだけ音と振動をまき散らす。それが『彼女』には良くないのだと口酸っぱく言われていたからだ。

給仕の女に付きゆつくりと歩く。その姿は王者の威厳すら漂う。

否。男は真正正銘の王だった。名をパパスという。

深き森、険しき山に囲まれた天然の要塞、堅牢にして優美さをも兼ね備えた古城グランバニア——その頂点に立つ男である。

はるか遠国にまでその勇名が響き渡るほどの猛者が、これほどまでに気もそぞろになる理由。それは——

「こちらです。中ではお静かに。マーサ様もご子息様もようやく落ち着いたところでございますゆえ」

「う、うむ……」

そう。パパスとその妻マーサに、待望の男子が誕生したのだ。

一国の王から一人の父親へ。魔物相手にも決してひるまないパパスだったが、今日ばかりはいつもどおりとはいかなかった。『自分

に子ができた』という初めての経験の前には、持ち前の冷静さなど蠟燭の火のように吹き飛んでしまっていた。

精緻な意匠の施された扉をゆっくりと開ける。かすかな熱と、そして溢れんばかりの聖なる気をパパスは感じた。

中央の寝台に横たわる妻が、気配を感じて振り返る。

「あなた……」

「マーサ……！　よく、よくやってくれた」

つい小走りに駆け寄る。厳格な顔にわずかな赤みを浮かべたパパスを見て、マーサが柔らかく微笑んだ。疲れの余りか若干やつれていたが、その表情は常日頃目にする以上に美しく、神々しさすらあった。

パパスの視線が、彼女の隣で毛布にくるまれた赤子へと行く。

「ほら。私たちの子よ。今は眠っているけど、とても元気な声を上げていたわ……」

「おお、おお！　下の階にも聞こえてきたぞ。そうか、男か！　元氣そうだ！　うむ、目元はお前にそっくりだ！」

自分でも訳の分からないことを喋る。その様子に乳母がくすりと笑った。

マーサが声をかける。

「ねえあなた……。この子に名前を付けてあげないと」

「うん？　おお、そうだな。何がいいか」

パパスはしばらく寝台の回りを歩いた。顎に手をあて、これまでにいくつも考えた候補の中から選んでいく。この感動を表現し、自分と愛する妻の宝となるに相応しい名を。

しばらくの沈思黙考の後、パパスはマーサに向き直った。彼には珍しい、満面の笑みを浮かべて言う。

「よし。トンヌラというのはどうだろうか」

「まあ、素敵な名前……賢そうで、優しそうで」

「だろう？」

「ええ。……ねえ、あなた。私もこの子の名前を考えてみたの」

遠慮がちな妻の申し出に、パパスは無言で先を促した。

「アラン……というのは、どうかしら？」

「アラン、か。いまいちぱつとしないが……お前が考えたのなら、そうしよう」

妻に笑いかける。ばさり、と深紅のマントを翻し、パパスは赤子とそつと抱え上げた。

「アラン。今日からお前はアランだ！」

「まあ、あなただったら……ごほっ、ごほっ！」

「マーサ？ どうした、しっかりしろ。マーサ！」

——声は次第に遠くなる。

——潮騒の音が、どこからか聞こえてきた。ぞぞん、ぞぞん……と。

2・船上の勇氣

ぎし……ぎし……

規則正しく響くその音に、アランは目を覚ました。

固い寝台に横になっていると、身体がゆっくりと上下に動いているのを感じる。揺りかごのように心地よいその揺れからアランは身体を起こした。

利発で優しそうな瞳が印象的な少年である。滑らかな肌は健康的に日焼けし、儚さよりはたくましさが目を引き。

アランは枕元に置いた帽子を手にとった。ざんばらで伸び放題の黒髪を、青い布を巻いて作った簡素な帽子で包み込んだ。

寝台の縁に腰掛けたとき、部屋の中で読み物をしていた男が振り返った。

「おお、起きたか。アラン」

「お父さん」

口元に蓄えた髭も凜々しいこの男はパパスといった。アラン自慢の父親である。

「うゝ……ん」と伸びをしてから、アラン少年は父の元へと駆け寄った。

まだたったの六歳ではあるが、父に連れられいくつかの旅を経験したアランは、寝坊という言葉とは無縁の生活を送っていた。これも長旅で鍛えられた結果である。

机の縁に顎を乗せ、しばらく父の横顔を眺めていたアランは、ふいに声をかけた。

「ねえお父さん」

「ん？」

「僕、ゆめを見たんだ。りっぱなお部屋で、お父さんがすごく格好いいマントをしているの。おうさまなんだって」

「王様？ はっはっは。アラン、どうやらまだ寝ぼけているようだ

な」

嘘じゃないのにな、とアランは思ったが、それ以上何も言わなかった。ただ不満そうに頬を膨らませるだけである。

その様子を見たパパスは苦笑を浮かべながら、読んでいた分厚い書物を閉じた。アランは以前、興味本意でその中身を見てみたが、長い文章どころか文字も読めないアラン少年はすぐに頁をめくるのを諦めた。それ以降、父の本にはあまり触らないようにしている。

「もうすぐ港に到着する。それまで外で遊んでなさい。潮風に当たれば眠気も覚めるだろう」

「うん」

「だがあまり走り回るんじゃないぞ。甲板にいる人々の迷惑にならないようにな」

「はい」

アランは駆け出し、すぐに何かを思い出して引き返す。部屋の隅に設えられたタンスから、薄紙に包んだ薬草を取り出す。

「これがあれば怪我をしてもだいじょうぶだね？」

微笑むパパスに、アランは薬草を片手に元気よく言った。

「それじゃ、行ってきます！」

階段を上がり、扉をくぐる。

途端に頬を撫でる冷たい風に、アランは思わず眼を細めた。

澄み渡る蒼い空。

天高くどこまでも盛り上がる雲。

風を受けゆつたりと飛ぶ鳥たち。

そして空よりもさらに深く濃い青に染まった大海原。

アランは巨大な船の上にいた。

数日前、アランたちはパパスの顔なじみの船長と偶然再会し、どこかのお金持ちが所有するこの船に便乗させてもらったのだ。目指すはサンタローズという村である。かつてパパスとアランが住んでいた長閑で平和な村だ。

そこはアランの記憶に残っている最初の故郷である。

サンタローズに帰れると思うと、自然と気持ちが高揚した。

陽光のまぶしさに目を細めながら、アランは口笛をくちずさむ。波に揺れる甲板上も何のその、軽やかな足取りで目当ての場所へと歩いて行く。やがて甲板の幅はぐっと狭くなり、揺れも大きくなった。船首の部分だ。

帽子と同じ青色の、粗末な布の服を海風にはためかせながら、アランは鋭く突き出た舳先部分へと進む。下を見れば目もくらむような高さだが、アランは取り立てて恐怖を感じた様子もなく、「うわあ！」と感嘆の声を上げた。

海。空。水平線だ。

世界はどこまでも広い。

いつか自分が大きくなったら、父とともに世界中を旅して回りたい。それが幼いアランの大きな夢であった。

「おおいつ！ 坊主、危ないぞ！ 戻ってこい！」

ふと背後から船員の呼ぶ声がした。気がつくとも舳先のかなり先の方まで進んでいたようだ。慌てて戻り、船員の前に立つ。全身真っ黒に日焼けした船員の男は大げさなため息をついた。

「ああびつくりした。まったく、坊主の身に何かあったら俺が船長にどやされるんだぜ？」

「ごめんなさい」

アランは素直に頭を下げた。船員は怒ったような、困ったような表情を浮かべていたが、やおら豪快に笑い始めた。

「ま、危ない危なくないは抜きにしてだ。坊主、お前よくあそこまで行けたな？ 怖くなかったのか？」

「ううん。とっても楽しかったよ。海って、すごく広いだね」

「そうかそうか。さすがパパスの旦那の息子さんだ。勇気がある」
「ばんばんばん、と頭を叩かれる。おそらく本人は撫でているつもりなのだろうが、アランとしてはたまったものではない。小さく「おじさん……いたい」とつぶやく。

だが船員の男は気にした風もなく、嬉しそうに語り始めた。

「いいか坊主。坊主が立ってた舳先の部分はな、俺たちの船乗りの中じゃ『勇気を試す場』になっているのさ。新米のヒヨッコどもは、まず大抵あそこに立つと怖じ気づく」

「え？ ふなのりさんなのにな？」

「そうさ。坊主は勇気がある。新米ヒヨッコの半分も生きちゃいないにもかかわらずだ。きっと大人になったらどえらいことをやってのけるぞ、坊主！」

「どえらいことって？」

「どえらいことは、その……どえらいことだよ。ま、まあそのうちわかるって」

ばんばんばん、と相変わらず容赦なく叩かれる。それが親愛の表れだと子どもながらに察したアランは、目の端に小さく涙を浮かべながらも笑顔でうなずいていた。

3・小さな出逢い

その後、アランは船の中を探検した。乗船してから数日、すでに何度も船内は見回っていたが、何度見ても面白い。

例えば風に揺れる帆の様子とか。

床一杯に敷き詰められた荷物の山とか。

何故か風呂場で自分を驚かそうとしてくる変なおじさんとか。

逢う人逢う人、みな笑顔で迎えてくれる。そして誰もが、アランの父パパスはすごい人だと言ってくれるのだ。アランにはそれが何より楽しく、そして誇らしかった。

だが、その楽しい旅もそろそろ終わりの時を迎えようとしている。水平線ばかりだった海に、うつすらと陸地の影が見え始めたのだ。「港が見えたぞー！」

マストの先に作られた見張り台で、船員が大声を上げる。にわかに慌ただしくなる船上の直中に立ちながら、アランは興奮と寂しさを同時に感じていた。

「そろそろお別れだな、坊や」

声をかけられ振り返る。真っ白な服を着た初老の男性が微笑んでいた。航海中、よくパパスと話をしていた船長だ。アランもずいぶんと可愛がってもらった。まるで実の息子のように。

わずかにうなだれるアランの頭を撫でながら、船長は言う。

「さ……お父さんと呼んできてくれないか。もうすぐ港に着く」

「うん」

小さくうなずいたアランは駆け出した。客室にいる父を呼びに行く。

アランから港到着の報を受けたパパスは感慨深そうにうなずいた。「サントローズを出てもう二年になるか。早いものだ。まだお前が四つのときだから、覚えていないかも知れないが」

「うっん。僕の故郷だよね、お父さん。覚えてるよ」

「そうか。では、行くとしよう。忘れ物がないようにな」

そう言くとパパスは部屋を出て行く。父に連れ立って扉をくぐったアランは、ふと背後を振り返った。誰もいなくなった部屋に向かって深くおじぎをする。

「お世話になりました。行ってきます」

辿り着いたのは、巨大な船体には少々似つかわしくない小さな港だった。

操舵手の妙技でぴつたりと横付けされ、棧橋の代わりに大きな板が船との間にかけられる。アランは父と並んで、その作業を感心しながら眺めていた。

そのとき、港に人影があることに気付いた。三人。

「ルドマンさん！ お待たせしました！」

「ご苦労、船長さん！ 相変わらず時間どおりで感心ですな！」

船長と気安げに会話する港の人物。遠目でも恰幅が良さがわかった。傍らには小さな女の子がふたり、寄り添っていた。

ルドマンと呼ばれた男が棧橋代わりの板に足をかける。——と同時に、右側にいた女の子がルドマンを追い抜いて船に駆け込んできた。黒髪が海と空の蒼に映える。あっという間にパパスの前まで辿り着く。

きよとんとするパパスに向かって、黒髪の女の子は気の強そうな瞳を向けた。

「おっさん。邪魔よ」

「お、おっさ……？」

思わぬ台詞にパパスが目を白黒させる。次いで女の子はアランにも目を向けた。ほとんど睨むような表情ながら、そこに潜む可憐な容貌にアランはどきりとした。

「こらデボラ！ 待ちなさい」

「ふんっだ」

ルドマンの声にも振り返らず、デボラと呼ばれた少女はさらに奥へと駆けていった。彼女が向かったのはアランが唯一、立ち入ることが許されなかった専用の客室がある場所だった。

ルドマンがようやく板を渡りきる。傍らにはもう一人の女の子がいた。

アランはまたも、どきりとする。

大きなリボンと空のような蒼い髪が印象的だった。デボラとは反対に、清楚な華を思わせる可愛らしい女の子である。

彼女はアランの視線に気付くと、わずかに身体をルドマンに寄せた後、はにかみながら頭を下げてきた。

ルドマンが恐縮の体でパパスに詫げる。

「申し訳ない、お客人。私の娘がとんだ粗相をしてしまいましたな……」

「いえ。お気になさらず。元気があるのは大変良いことです。……その子もあなたの？」

「ええ。フローラと言います。私はこの子らの父、ルドマンと申します。さ、ご挨拶なさい。フローラ」

「はい、お父様。……初めまして。フローラと言います。さきほどはねえさ……姉が失礼をしました」

「これは驚いた。ずいぶんしっかりしたお嬢さんだ。……つと、失礼。挨拶が遅れましたな。私はサンタローズのパパス。こちらは私の子、アランです」

「は、はじめまして……」

突然名前を呼ばれ、アランはどきどきしながら礼をした。何だか格好悪いなと思いつつ、ゆっくりと顔を上げる。

ルドマンは「利発そうなご子息ですな」と朗らかに笑い、フローラは先ほどよりも打ち解けた笑顔を見せてくれた。アランは再び顔を赤くしてうつむいた。

それからパパスとアランは船長に感謝の礼を言い、併せてルドマンたちの船旅の安全を祈った。彼らもまた、パパスたちの行く末に

幸多きことをと祈ってくれた。

船はゆっくりと出航していく。その後ろ姿を見つめながら、ア
ンはふと、偶然出逢った二人の少女の顔を思い出すのであった。

4・リスの恩返し

船が出てすぐ、パパスとアランの元に駆け寄ってくる人影があった。

「おおつ、パパス！ パパスじゃないか」

「あらあら、まあまあ。ずいぶん久しぶりだねえ！ 二年ぶりじゃないかい？」

彼らは港の管理をしている夫婦だった。パパスとは旧知の仲である。

しばらく旧友と雑談をしていたパパスは、所在なげに立っていた息子に向かって言った。

「父さんはこの人たちと話があるから、しばらく散歩でもしていないかい」

「うん。わかった」

「よし。だがアラン、港の外には出るんじゃないぞ。危ないからな」

「はい」

アランは歩き出した。

港は陸から建物だけ突き出たような形になっていて、海面がすぐ側にある。海からの風も気持ちよく、アランは終始上機嫌だった。

ふと、どこからか声が聞こえた。

きい、きい……という動物の声だ。アランの表情が変わる。その声はどこか、助けを求めているように思えたからだ。

声の主はすぐに見つかった。港の端、木組みの足場がやや崩れているところで、大きなリスが一匹足を取られていた。口には小枝を噛んでいる。どこかにその枝を運ぼうとして誤って嵌ってしまったのかもしれない。

アランが近づくと、リスはさらに甲高い声を上げて暴れた。じっとリスを見つめながら、アランはゆっくりと言う。

「だいじょうぶ。もう心配いらないよ。キミを助けてあげる」

リスがぴたりと大人しくなる。リスの大きな黒い瞳がアランを見つめていた。

慎重にその身体に手をかけ、アランはリスを解放した。ほっと息をつく。どうやら怪我もないようだ。

「ほら。お行き」

促すとリスは勢いよく駆け出した。微笑みながらそれを見送るアラン。

ところがリスは、港と陸地とを繋ぐ栈橋のところで立ち止まった。アランを振り返り、尻尾とヒゲをぴくぴくと動かす。

「……付いてこいつてことなのかな？」

アランが歩き出すとリスも走り出す。アランと一定の距離を保つように、たびたびリスは振り返ってきた。どうやら本当にどこかへと案内してくれているようだった。

栈橋を越えてすぐ脇に林がある。リスはその中へ入っていく。しばらく行くと、何やらこんもりと枝が盛られた場所へと辿り着いた。そこから数匹の小さなリスが顔を覗かせている。

「ここがキミの家なんだ。立派だね。でもいいの？　僕をここに連れてきても」

するとリスは巢の回りに落ちているものを鼻先で示した。財布やら人形やら、おそらく旅人が落としたであろう品々が土にまみれて転がっているのがわかった。中にはわずかながらお金ゴールドもある。

どうやら助けてくれた御礼に持っていけということらしい。

一度は断ろうとしたが、リスが服の裾を引っ張ってまで引き留めようとするので、アランは仕方なく落とし物のひとつを手を取った。細長い木製の武器——『ひのきの棒』である。おそらくただの枝と間違えて持ってきてしまったのだろう。巢の脇にどことなく邪魔そうに置いてあるのが印象に残っていたのだ。

落とし物の割にはしっかりした加工である。幾重にも布が巻かれた握りの部分に手を添える。見よう見まねで構えてみると、何だか

憧れの父に近づけたような気がして嬉しくなった。

リスがきい、きいと鳴く。「気に入ってくれてよかった」と言っているようだった。

「ありがとう。じゃあ、元気でね」

アランはリスたちに別れを言った。元来た道を引き返していく。パパスとの旅で鍛えられたせいかわ、方向感覚には少し自信がある。迷うことよりも、父の言いつけを破った形になってしまったことの方が心配だった。

「早く戻らなきゃ」

少し焦りながら、アランは林を抜ける。

その直後だった。

「えっ……？」

目の前にモンスターが現れたのは。

5・はじめての戦い

「ピキイッ」

草むらから現れた三体のモンスター。青く小さな身体を震わせながら、アランに対して威嚇の声を上げてくる。

「ス、スライム!？」

「ピュキイッ」

「うわあっ!」

いきなり襲いかかられ、アランは尻餅をついた。彼の頭があった場所を、一匹のスライムが通過していく。体当たりされたのだ。以外と俊敏なスライムの動きに、アランは背中に汗をかく。

別の一匹が正面から迫ってきた。アランは唇を噛み、右手の『ひのきの棒』を握り直した。

父の姿を思い出しながら、正眼に構える。

「……来いっ」

「キユイイッ!」

アランの声に応じて、スライムが飛び込んできた。アランは目を逸らさず、大きく武器を振り上げた。震える足を叱咤して、一步前へ踏み出す。

「はあああっ!」

そして思いっきり振り下ろした。

ひのきの棒のちょうど中心のところで、スライムの身体をとらえる。握りの部分に痺れるような衝撃が伝わってきた。

力が緩み、手放しそうになるのを堪え、最後まで振り抜く。

スライムの身体が吹っ飛んだ。

「……イ……」

草むらに落ちたスライムは小さく声を上げ、やがて姿が消えた。アランは荒い息をつきながら、自らの手を見る。

そこにはまだ、先ほどの感覚が痺れとして残っていた。

「やった……！」

会心の一撃――

アランは初めて、自分の力だけでモンスターを撃退したのだ。だが――勝って兜の緒を締めるには、まだアランは幼すぎた。

「キイッ」

「あっ!？」

残った一匹がアランの左腕にかみついたのだ。鋭い痛みとともに、左腕がかあつ、と熱くなる。無我夢中でスライムを引きはがした拍子に、赤い血が空に舞った。

数歩下がって、アランは小さく呻く。先ほどまで感じていた高揚感が急にしぼんでいくようだった。

仲間と合流したスライムが二匹、真正面から迫ってくる。

「これが」

戦い。

父の雄姿を間近で見たときは「何て格好いいんだろう」と思っていた。いつか自分も、と思っていた。

でも、今の自分は――

「キイ、ピキュキイッ！」

「……お父さんっ！」

ぎゅっ、とアランは目をつぶる。

そのときだ。

「おおおおおっ！」

勇ましい、けれど懐かしい雄叫びとともに、風がアランの横を通りすぎた。

目を開ける。ああ、とアランは歓喜の声を上げた。

「お父さん！」

「下がっている、アラン！」

言いが早いのか、パパスは愛剣を手にスライムの一匹に斬りかかった。

その動き、まさに疾風迅雷。

スライムは避けることもできずに真つ二つに両断される。

残った一匹がパパスの方を向く。その時にはもう、パパスは次の踏み込み動作に入っていた。

「むんっ！」

返す刃で雑草ごとスライムの身体を薙ぎ払う。悲鳴も上がらずスライムは全滅した。

恐るべき二回攻撃。

アランは感動に打ち震えるとともに、自らが握っていた『ひのきの棒』を少ししよげた表情で見つめた。

「大丈夫か、アラン」

パパスが近づいてくる。アランは笑顔でうなずくとして、左腕を押さえた。

「……痛っ」

「待つてろ。すぐに治す。………、ホイミ！」

かざしたパパスの手から、白く温かな光が漏れる。アランの腕の傷がだんだんと塞がっていった。

そうだ、とアランは思い出す。パパスは剣技だけではない、回復呪文も使えるのだ。アランはまだ、呪文のひとつも使えない。覚えるならまず真つ先にこの呪文にしよう、とアランは思った。

腕の痛みも傷口もすっかり消えてなくなったのを見届けると、早速パパスはアランを叱った。

「アランよ。外に出ててはいけないと父さんは言ったはずだな。言いつけはきちんと守らなければいけないぞ」

「……ごめんなさい」

「ふむ」

すると何を思ったか、パパスは草むらを見た。

「しかし、たった一人でスライムを倒すとは、正直父さんも驚いた」
「……え？」

「だが今後はひとりで危ないことはしないように。いいな？」

「うん」

「よし。では行くでしょう」

差し出された父の大きな手を握り、アランは笑顔で歩き出した。

6・サントローズの村

広々とした草原となだらかな丘をひたすら歩くと、鬱蒼と茂る森と小高い山が見えてきた。そこがアランたちの目的地である。

木々に半ば隠れるように、ひっそりと村があった。

「ようやく着いたか。サントローズ」

パパスが感慨深げにつぶやく。普段は勇猛で冷静沈着な父だが、どこことなくほっとして嬉しそうだのアランは思った。

村の入り口にあたる木組みの門の前には、簡素な鎧を着込んだ男が門番として立っていた。彼は村にやってくる人影に一瞬目を細めたものの、すぐに破顔一笑、満面の笑みで迎えてくれた。

「やあ！ パパスさんじゃありませんか！ お久しぶりです！」

「ああ。しばらくぶりだった。皆に変わりはないか？」

「ええ、もちろん。おっと、こうしちやいられない。皆に報せないと！」

言うが早いか、男は門の番を放り出して村へと走っていった。アランはつぶやく。

「お仕事、いいのかなあ」

「はっはっは」

むつかしい顔をするアランに、パパスは声に出して笑った。

父に連れられ門をくぐる。その先の石段を登ると、さっそく出迎えがあった。

「パパスさん、お帰りなさい。二年ぶりですね」

「うむ」

「またうちによってくださいね。良い酒を用意してお待ちしていますから。旅の話を聞かせてくださいよ」

「ああ、楽しみにしていよう」

笑顔で話しかけてくれたのは村で唯一の宿屋と酒場の店主だった。丸々と太った身体にはどこことなく、アランも見覚えがあった。

砂利道沿いに歩く。小川をまたぐ小さな橋を越えた辺りで、今度は大声に迎えられた。

「ようパパス！ 二年もどこほつつき歩いていたんだ！」

見るからにガタイの良いその男に、パパスは苦笑を浮かべた。

「はは。相変わらず威勢が良いな」

「ったりめーよ。アンタとはまだ飲み比べの勝負がついてねえんだ。付き合ってもらうぜ。ついでに旅先でのあれこれも聞いてやつからよ！」

「うむ。受けて立とう」

がつ、と拳を合わせる二人。口は悪いが、男もまたとても嬉しそうだった。「お、この子があのときの坊主か。大きくなったなあ」と頭をぐりぐりされ、アランは恥ずかしいやら嬉しいやら複雑な気持ちになる。

すっかりずれてしまった帽子を直しながら再び父の後ろをついていく。空は雲一つ無い快晴だ。暦の上ではもうすっかり春である。しかし。

「……くしゅん！」

「おお、風邪か。アラン」

「ううん。でも、何だかすこしさむいね」

「……うむ。確かにな。季節はとくに春だというのに、風が冷たい」

パパスが神妙にうなずく。道ばたでは季節外れのたき火をしている人がいた。そういえば来る途中の道沿いにあった畑は、発育が遅れているのか少々寂しい見た目だったことをアランは思い出す。

不思議なこともあるんだなあ、とアランは思った。

「パパス殿」

もうすぐ目的の場所というところで、シスターに出迎えられた。物静かな感じの初老の女性が、往来の真ん中でまっすぐにパパスを見つめている。

「よくぞ戻られました。ご壮健そうで何より」

「はい。皆には心配をかけました」

「これも神のお導きなのでしょう……とまあ、堅苦しい挨拶は抜きにして」

突然、シスターがにっこりと笑った。

「わーい、わーい。パパスさんが帰ってきた！ 嬉しいー！」

「シ、シスター……」

「うふふ。嬉しいことを我慢するのは良くないことですよ。さあ、お疲れでしょう。サンチョさんがご自宅でお待ちですよ」

パパスはシスターに深々と礼をした。去り際、シスターがにっこりと笑ってアランに手を振ってきた。何だか嬉しくなって、アランもまた満面の笑みで手を振り返した。

教会へと続く道の脇に、アランたちが目指す家がある。

質素だが立派な造りの家の前で一人の男が立っていた。その姿を見て、パパスとアランの表情が自然と緩んだ。

7・お姉さんな少女

「旦那様！ お坊ちゃん！ お帰りなさい！」

「サンチヨ！ 今戻ったぞ！」

パパスが破顔一笑する。アランも満面の笑みで手を振った。

丸々と太った身体を揺らしながら走ってきたのは、パパスの召使い、サンチヨである。口ひげに小さな丸い目が印象的な、とても人当たりの良い男だ。孤高の人というイメージがあるパパスが唯一、彼だけは従者として認めている。サンタローズの家を留守にしている間は、彼が自宅の一切をきりもりしていた。

外見からは想像できないようなてきぱきとした動きでサンチヨはパパスらから荷物を受け取った。久しぶりに逢えた嬉しさからか、目にはわずかに涙まで浮かんでいる。

「サンチヨ、泣いてるの？」

アランが尋ねる。すると途端にサンチヨの顔がぐしゃっと崩れた。「おお、おお、アラン坊ちゃんも！ 大きく、遅しくなられて。このサンチヨ感激ですぞ」

「僕は元気だよ。サンチヨはあいかわらず、すぐに泣いちゃうんだね」

「こら、アラン」

パパスが小声で叱り、アランが首をすくめる。涙を拭ったサンチヨはパパスたちを自宅へと招き入れた。

簡素だが手入れと掃除の行き届いた居間。そこには先客がいた。

「あら、パパスさんじゃないかい」

「ダンカンとこのおかみさんじゃないか。お久しぶりです」

意外な来客にパパスが驚く。サンチヨに負けないほど恰幅の良いおかみはからからと笑った。

するとその影からひとりの女の子が顔を出す。

「こんにちは。おじさま」

「……？」

パパスは首をかしげる。見覚えがない女の子だったからだ。

「この子は」

「ああ、そうか。パパスさんは初めてだったっけ。あたしの娘だよ。ビアンカってんだ」

おかみが紹介する。ビアンカと呼ばれた女の子は再び頭を下げた。柔らかそうな金髪を三つ編みにした彼女がにっこりと笑う様はとも明るく愛らしかった。どことなくお転婆そうでもある。

パパスとサンチョ、それからおかみが話を始めた。父の隣で所在なげに立っていたアランは、ふと裾を引かれて振り返る。ビアンカがすぐそばに立っていた。

「ね。おとなたちのお話が長そうだから、向こうに行かない？」

「う、うん」

「行きましょ！」

言うが早いか、ビアンカはアランの手を引いて二階へと上がっていく。元気の良い子だなあ、と思うと同時に、どこか懐かしい感じをアランは抱いた。

二階はパパスの書斎もかねた部屋だった。壁際にぎっしりと本が詰まった棚が置かれている。アランとビアンカは、少し高い椅子によじ登った。

「じゃあ、あらためて自己紹介ね。わたし、ビアンカ。あなたはアランでしょ？」

「え？ 僕のこと知ってるの？」

「うん。でも、おぼえてないのもしかたないよね。前に会ったときは、アランとつても小さかったもの。知ってる？ わたしはあなたよりも二さいもおねえさんなのよ！」

自慢げに胸を張られた。アランが今六歳だから、ビアンカは八歳ということになる。だから懐かしく感じたんだとアランは思った。

「そうだ！ ご本読んであげる。ちょっと待っててね」

ぽん、と手を打って、ビアンカは椅子から降りた。本棚から一番薄い本を取ってきて、机の上に広げる。が。

「えーと。……………？ ………………」

読めない。かろうじてふりがなの部分だけは拾い拾いして読んでいたが、それ以外はさっぱりのもようだった。首を傾げ、むつかしうに眉根を寄せて、何分もしないうちにビアンカはさじを投げてしまった。

「だめだわ。このご本、むずかしすぎるもの」

「そうだね。でもすごいや。僕はまだ、文字がぜんぜん読めないものの」

「だってわたしはおねえさんだもの。えっへん」

胸を張る。それからふたりして声に出して笑った。

「ビアンカー、そろそろ宿に戻るよ！」

階下から呼ぶ声にビアンカが「はい」と答える。丁寧に本をしまつてから、ビアンカはアランを振り返った。にぱ、と笑う。

「しばらくはサンタローズにいるから、またお話ししようね！ アラン！」

「うん。またね、ビアンカ」

手を振り合う。とんとんとん、と軽やかな音を立ててビアンカは一階へと下りていった。

8・ともだちのために

翌日。

久しぶりに温かい食事と温かいベッドに包まれたアランは珍しく寝坊をしてしまった。目が覚めたときにはすでに太陽は高く昇っていて、眠い目をこすりながら一階に下りる。

居間にはパパスとサンチョが揃っていた。

「坊ちゃん、おはようございます」

「うん。おはよう、サンチョ」

「久しぶりの我が家だ。ぐっすり眠れたか、アラン」

父の言葉に「うん」とうなずく。ふと、パパスが剣を携えていることに気がつき、首を傾げる。

「お父さん。どこかへ出かけるの？」

「ああ。村の外に出るわけではないから、夕方までには戻るつもりだ。……ではサンチョ。行ってくる。アランを頼むぞ」

「はい。行つてらっしゃいませ、旦那様」

出かける父の後ろ姿を見ながら、アランはテーブルについた。すぐに温かなスープが出されたが、しばらくそれには手を付けず、アランはどことなく寂しそうにつぶやいた。

「……お父さん、村についても忙しそうだね」

「お父上には大切なお仕事があるのですよ」

「せっかくあそんでもらえると思ったのに」

テーブルの端っこに顎を乗せて頬を膨らませる。その様子にサンチョは苦笑していた。

「さあさ、坊ちゃん。せっかくのスープが冷めてしまいますよ」

「はぁーい」

ぶーたれていたアランだが、久しぶりのサンチョの食事にすぐに

機嫌を取り戻す。旅をしている間は粗食を余儀なくされたときもあったから、育ち盛りのアランにとってお腹いっぱいご飯が食べられることはとても幸せなことだった。

「ごちそうさま！　ねえサンチヨ、外であそんできてもいい？」

「ええ。外は良い天気です。ただ少し肌寒いので、お召し物には注意してくださいね。あ、それから、くれぐれも危ないところへは行かないよう」

「わかってるよ。サンチヨはしんぱいしようだなあ」

そう言つてアランは椅子から降りる。少し考え、アランは着ている服の上からさらに一枚薄地のマントを羽織り、あの親切なりすがくれた『ひのきの棒』を腰に下げる。

ちよつとした冒険者気分になったアランは、「いつてきます！」と元気よくサンチヨに言つてから家を出た。

途端に吹きつける冷たい風。そういえば昨日の晩ごはんのとき、パパスとサンチヨが農作物がどうのこうの言っていたことを思い出す。

「はやくあたたかくならないかな。みんな困っているのに」

雲一つない空を見上げながらつぶやく。

村の中心を通る砂利道まで出たところで、ふとパパスの姿を見かけた。ちよつと教会から出てきたところだ。パパスは足早に歩き始める。

お仕事のじゃまをしちゃだめだ、という思いが一瞬アランの頭をかすめる。だが結局、父がどんな仕事をしているのかという好奇心の方が勝った。こつそり後を追う。

するとパパスは川沿いにある民家のひとつへと向かつて行った。玄関では老人がひとり待ち構えている。老人と二言、三言話をしたパパスは、そのまま民家の中へ入っていった。あそこが父の仕事場なのだろうか、とアランは思う。

何をしているのだろう、お父さん。

さすがに他人の家の中まで追うわけにはいかないと思ったアラン

は、民家が見渡せる教会横の高台に向かった。崖から落ちないように、慎重に民家を見下ろす。

しばらくして、パパスが民家の裏口から出てきた。薪割りでもお手伝いするのかな、とアランは思った。しかし手に斧は持っていない。それらしい雰囲気はなかった。

「……あれ？」
首を傾げる。

パパスは、一緒に出てきた老人に見送られ、川に浮かべてあった小舟に乗って上流へとこぎ出していったのだ。その先は大きな洞窟がある。すぐに、父の姿は洞窟の奥へと消えていった。

「お父さんのお仕事って……どうくつのたんけん？」

一瞬、後を追ってみようかなと思う。だが舟なんかないし、第一危ないところへは行くなとサンチョに言われている。

「むう……」

けれど、気になる。

もやもやした気持ちを抱えたまま、アランはその場を後にした。

「そういえば、ビアンカはまだサンタローズにいるんだっけ」

宿屋の前を通ったとき、ふとアランは思い出した。まだ胸のもやもやを抱えていたアランは、せっかくだからこっちから遊びに行こうと思った。

扉をくぐる。

「いらっしやい……おや。パパスさんとこの坊主じゃないか」
「こんにちは」

ぺこりと頭を下げてから辺りを見回す。小さいながら小綺麗に掃除がされた室内の奥には、いくつかの部屋が続いている。だが当然のことながら、どこの部屋にビアンカがいるのか見ただけではわからない。

すると宿屋の主人が気を利かせてくれた。

「もしかして、ダンカンさんとこのお嬢さんに会いにきたのかい？」

「うん。こっちにまだいるって聞いて。一緒にあそぼうと思ったんだ」

「なるほどね。ま、坊主にとつちや久しぶりに同じ年頃の子と会えたってことなんだろうなあ。いいよ、案内してあげる」

人の良い笑みを浮かべ、宿屋の主人が二階へとアランを連れて行く。

西側奥の、いちばん日当たりのいい部屋にビアンカたちは居るという。

「この寒さで、なかなか旅人がやってこないからなあ。ウチとしては商売あがったりだ。だけど、そんな中でもはるばるアルカパからやってきたあのふたりは相当の大物……というか強者だよ」

廊下で主人が言う。そしてふいに声を潜めて、

「……でも今の話は、ふたりにはナイショだよ」

「うん」

「良い子だ。……っと、この部屋だよ坊主。すみません、おかみさん。いらっしやいますか」

主人が呼びかけると、しばらくして扉が開いた。怪訝そうに首を傾げていたおかみさんは、アランの姿を見つけるなり表情を崩す。

「おや、アランじゃないか。もしかしてビアンカに？」

「うん。一緒にあそぼうと思って」

アランが言うと、おかみは何故か複雑そうな顔をした。

「うーん。いつもなら思いっきり遊んでおいでと言うところなんだけどねえ」

「？」

「あ！ アランだ。どうしたの？」

部屋の奥から声がする。ビアンカが小走りに近づいてきた。アランはどこかほっとしながら笑った。

「こんにちは、ビアンカ。あそびにきたよ」

「え、ホント!？」

「駄目だよビアンカ。いつ薬が届くかわからないんだから」
表情を輝かせるビアンカにおかみさんが言う。

「薬が手に入り次第、アルカパに戻るんだからね。父さんが待ってるんだよ」

「……うん。ごめんなさい」

「ねえ。なにがあつたの？」

ビアンカが哀しそうな顔をするので、アランもまた哀しい気持ちになりながらたずねる。落ち込んではいられないと思ったのか、ビアンカはむりやり笑顔になった。

「あのね。アルカパにいるわたしのお父さんが病気になっちゃったの。それで、よくきくお薬がサントローズのどうぐやさんにあるって聞いて、お母さんと一緒にとりに来てたの。でも、そのどうぐやさんがなかなか帰ってこなくて、少しこまってるのよ」

「かえってこない？」

「お弟子さんの話じゃ、どうやら洞窟に材料を取りに出かけて帰ってきてないみたいなんだよ。まあ、こういう時がないわけじゃないらしいし、大事ではないとは思うんだけどね。ただあんまり日が経ちすぎるとウチの人が心配だから、できるだけ早く薬を持って帰りたいんだよ。それでビアンカにもあんまり外には出るなって言っているのさ。すぐに出発できるようにってね」

そう言っておかみさんはため息をついた。

「誰か洞窟まで様子を見に行ってくれないかねえ……」

「お父さん」

ビアンカもどことなくしゅんとしている。

とても遊びに行けるような雰囲気ではなかった。アランはすぐのこと部屋を後にする。

しばらくうつむき加減で廊下を歩いていたアランは、ふと立ち止まった。腰にさげている『ひのきの棒』を見る。

『誰か洞窟まで様子を見に行ってくれないかねえ……』

「……よし！」

アランは決意の表情で柄を握りしめた。

9・サントローズの洞窟

川から流れてくる湿気が肌に冷たい。

緊張を解すため、大きく息をする。胸の中に入ってくる空気は、外のものとは明らかに違っていた。

アランは今、洞窟の中にいる。

ビアンカたちの話を聞いて意志を固めたアランは、その足でここへ訪れたのだ。途中、入り口のところで門番代わりの男に呼び止められはしたが、特に追い返されることはなかった。

「中は人が通れるようになってるが、モンスターもいる。それでもいいならおじさんは止めないよ」

そう言っすんなり通してくれたのだ。

なるほど、彼の言うとおり、洞窟の中は点々と松明が灯され、足元も人が通りやすいようにならされている。この洞窟で作業をする人のために整備されたのだろう。

だが、それでもアランにとっては初めてのひとりでの冒険である。『ひのきの棒』を両手に握りしめ、アランは緊張の面持ちで奥へと進んで行った。

アランの胸にあるのは、困っているビアンカたちを助けたいという思いと、勇敢なパパスの息子であるという誇り。奥にいるであろうパパスのことを思うと、若干だが勇気が湧いてきた。

サントローズに来る前、船員に言われたことを思い出す。

『坊主は勇気がある。新米ヒヨッコの半分も生きちゃいないにもかかわらずだ。きっと大人になったらどれくらいことをやってのけるぞ』

「……こわくない。だいじょうぶ。僕がやるんだ」

かつん、かつんと洞窟の中に靴音がこだまする。どこか遠くで「キィ、キィ」という声を聞いたような気がした。間違いない。いく

ら整備されているとはいえ、ここにはいるのだ。モンスターが。
そのとき。

「ピキーン」

「っ！」

左手、岩陰からスライムが飛び出してきた。一匹。威嚇するように甲高い声を上げている。

だがアランは取り乱さなかった。息を吸い、吐き、また吸い、吐く。

『ひのきの棒』を構える。要領はわかっていた。

「僕は…… 負けないっ。行くよっ！」

「ギューピイッ！」

荒い息をつく。

岩の一つに背を預け、アランは休息を取っていた。額に浮かぶ汗、しかし洞窟内が涼しいせいとか、すぐに冷たく乾いてしまう。風邪を引いてしまうかもしれないとアランは思った。

だがその表情は明るい。

最初のモンスター、スライムを撃破してからしばらく経った。

その間、幾度も戦闘を繰り返し、その都度退けてきた。『自分は戦える』ということに密かな自信を深めていったのだ。

何より。

「——、ホイミ」

短く、丁寧に呪文を唱える。

途端、掌に温かい光が集まり、戦闘で受けた傷を癒していく。

呪文とは世界から与えられた力だという。天賦の才を持ち、経験を積んで、その資格を得た者だけがそれにふさわしい呪文を行使することができる。

アランは最初に覚えることができた呪文が回復呪文ホイミであることに、胸がいっぱいになるほどの喜びを感じていた。パパスが自分を心配してかけてくれる呪文、今度はそれをアランの方からパパス

スへとかけることもできるのだ。それはアランにとって、とても誇らしいことだった。

だが、嬉しいことばかりではない。

重なる戦闘で、リスからもらった『ひのきの棒』にひび割れが起きたのだ。

攻撃を空振りし、思いっきり岩を叩いてしまったことが響いたのかもしれない。これではいつ使い物にならなくなってしまうかわからなかった。

少しだけ悩んだ。

「きつとまだ、だいじょうぶ」

気が大きくなっていたアランはそのまま勢いよく立ち上がり、再び歩き始める。

右手にもった武器が、ぱきり、と微かな異音を立てた。アランは気付かなかった。

10・痛恨の一撃

がこん、という妙な音が響いたのはそのときだ。

アランが振り返ると同時に、細かく砕けた石が高速で頬をかすめる。

「……っ」

緊張で身体が硬くなった。それはアランにとって、初めて出会うモンスターだった。

身の丈はアランより低く、しかしその小さな手に持つのは巨大な木の鎚。どこか愛くるしい容姿とは裏腹に、闘争本能をみなぎらせた目をしている。足元には、鎚で抉られた痕がくつきりと残っている。

『おおきづち』だ。

その小さな迫力に思わず唾を飲み込むアラン。たじろいだ一瞬の隙を突き、おおきづちはいきなり襲いかかってきた。

力任せに、大上段から木鎚を振り下ろす。

再び、がこん、という異音が響く。地面を叩いた音だ。

横っ飛びで攻撃をかわしたアランは、その威力に冷たい汗をかく。だがこれまで戦ったスライムや、こうもりの姿をした『ドラキー』などと比べれば、攻撃が美味な分かわしやすかった。

地面にめり込んだ木鎚を引き抜くのに手間取っている間に、アランは横合いから『ひのきの棒』を振り抜いた。

「いやああっ！」

手首から肘、肩、そして身体全体に伝わる確かな手応え。アランの攻撃を受け、おおきづちは吹っ飛んだ。

よし、やった——そうアランが思ったとき、おもむろにおおきづちが起き上がった。そして何事もなかったかのように再び木鎚を振

り上げる。その動きにはまるで変化がない。

効いてないのか。アランはたじろぎながらも、再び攻撃をかわした隙を狙って武器を叩き付ける。

だがおおきづちは、まだ倒れない。

「……いたっ！」

手首に違和感。無理矢理叩き付けたせいで少しひねったようだ。思わず、手首を押さえる。

おおきづちから視線を外した、その刹那。

「あっ」

気がついたときには目の前に木鎚が迫っていた。とっさに『ひのきの棒』を構え、攻撃を受け止める。

武器が、おおきづちの攻撃を受け止める衝撃。

直後、『ひのきの棒』は真ん中から粉碎された。

木鎚の勢いは止まらない。そのまま振り抜かれた——腹に直撃。

「……かふっ」

ふわ、と身体が浮いた。

ぐるん、と世界が反転して。

息も吸えないまま地面に叩き付けられた。

——痛恨の一撃。

「げほっ、げほっ。ごほっ！」

まともに息ができない。苦しさから手に力が入る。折れて使い物にならなくなった『ひのきの棒』が手の中にあった。

「げほげほっ、……っ！」

——その攻撃を前転でかわせたのは、ほとんど偶然に近い。

アランは苦しさから逃れようと無理矢理息をするが、うまくいかない。涙がにじんだ。

おおきづちの動きには、やはり変化がない。

手にした木鎚をぎゅっと握りしめたのがわかった。

アランの頭はその瞬間、真っ白になった。

「う、うわああああああっ！」

逃走。全力で走った。

ずきん、ずきんと腹が痛む。実際はアランが思うほど足は動いていなかったのだが、必死のアランはそのことにも気付かない。

とにかく、立ち止まったらやられてしまうと思った。

——どれくらい走っただろう。

ついに身体の方が音を上げて、アランは座り込んだ。そこがちょうど湧き水の湧いているところだったから、アランは無我夢中で水を口にする。爽やかで、微かに甘みのある水に混じり、何とも言えない苦みが口の中に広がる。それが血の味だとアランは初めて知った。

岩に背を預ける。

そして思い出したかのように、自らが走ってきた通路を見た。

おおきづちは、追ってこなかった。やぶれかぶれの逃走は、何とか成功したようだった。

「ふうう……」

腹の底からため息をつく。そして攻撃を受けたお腹をさすった。

わずかに痛みが残るが、思ったよりひどくない。さっき水を飲んだおかげか、気持ちの方はかなり楽になっていた。

ホイミをかける。だが呪文を唱えたのも束の間、傷が癒えきる前に癒しの光は消えてしまった。どうやら精神力の方が切れかけているらしい。

おそろおそろ、手を見る。そこにはまだしっかりと、折れた『ひのきの棒』が握られていた。

武器もない。

呪文もしばらく使えない。

いや、それより。戦闘から逃げた自分を、パパスはどう思うだろうか。そのことの方が心配だった。

憧れの父なら、こんなときどうするだろう。

アランはじっと、天井を見つめていた。

そのときだ。アランの身体が再び固まる。聞こえたのだ、あの甲

高い声が。

「キュイツ!?!」

間違いない。スライムだ!

アランは唾を飲み込んだ。血の味は、まだ消えていなかった。

11・スライム君

「キュイツ！ まって、いじめないで！ ボクはわるいスライムじゃないよ」

「……え？」

折れた『ひのきの棒』を構えたアランは、突然ひとの言葉を喋り始めたスライムに呆然とした。

ぽよん、ぽよん、と地面を跳ねる姿はまさしくスライム。けれどよく見ると、その大きな目に宿る光がどことなく優しそうだった。スライムはアランの姿に驚いたのかしばらく離れたところにいたが、やがて親しげに近づいてきた。

「うん。キミはわるいひとじゃないんだね。なんとなくわかるよ」

「えっと。スライム、くん？ 君はどうして言葉がわかるの？」

「ボク、ときどきここにくるしよくにんさんたちとなかがいいんだ。ごはんをもらったり。ことはしぜんにおぼえちゃった」

「そっか。じゃあ君はわるいスライムじゃなくて、しよくにんさんたちの友達なんだ」

「そう！ ともだち！ ともだちだよ！」

スライムは嬉しそうに一回転した。その可愛らしい仕草に、アランも疲れを忘れて微笑む。するとスライムは少し声を落として聞いてきた。

「ところで、キミ、おおきづちにいじめられていたみたいだけど、だいじょうぶ？ あのひとたち、ぜんぜんてかげんしてくれないから」

「うん。ひどいケガはしてないんだけど……見てたの？」

「ごめんね。ボク、とってもよわうちいから、たすけにいけなかったんだ。それに、ボクはひととなかよくしているから、おなじスラ

「イムからはきられているんだ」

「そんな！　こんなにいい子なのに。ひどいよ」

「でも、ここにいればしょくにんさんがきてくれるから、さみしくはないよ。さすがにひとのすんでいるところまでは、いけないけれど……」

「そっか……」

アランはうつむく。モンスターと仲良くできることはアランにとつてとても嬉しい発見だったが、そのせいでモンスターの仲間と離ればなれなのは寂しいと思ったのだ。

「ねえスライム君。僕と友達にならない？　僕はアラン」

「アラン！　いいなまえだね！　でもこまったな。ボクはきまったなまえがないんだ。しょくにんさんはいろんなよびかたをしてくれるし……スラリンとか、スラぼうとか……でもスライムくんってよびかたはいいな！　それにしてね」

「う、うん。わかったよ、スライム君」

苦笑いしながらアランは思う。もし自分がこのスライムのような友達を他に持てたとしたら、その子ともずっと仲良くしていこう。

「そういえば、しょくにんさん、だいじょうぶかなあ」

「どうしたの？」

「うん。ちよつとまえにね、しょくにんさんがこのどうくつにはいつてきたんだけど、まだかえってきてないんだ。いつもならとっくにかえりのあいさつによってくれるのに」

「それって、お薬を作っているしょくにんさん？」

「そう！　ひげもじゃだけど、とってもやさしいひとなんだ。しつてるの？」

「会ったことはないんだけど……帰りを待っているひとがいるんだ」

「それはいけないね。たしかあつちのおくのほうにいったとおもうよ。ちよつとまえにらくばんがあつて、おおきなあながあいているからあぶないよって、おしえてくれたんだ」

「そっか。わかった、ありがとう。スライム君」

アランは立ち上がる。意気揚々と歩き出そうとして、ふと、手元に残った武器に気がついた。

「あ……でも、僕にはもう戦うための武器がないんだった。どうしよう。一度戻った方がいいのかな？」

「ぶき？　ぶきならあるよ」

「え？　ほんと？」

「こつち」

そう言って、スライムはアランを奥へと導く。岩の陰に隠れるように、それは置いてあった。

「これだよ。しょくにんさんがつかってたんだけど、もういらないからってボクにくれたんだ。でもボクにはつかえなくて、こまってたんだ」

「これって、『かしの杖』……かな」

アランの身長よりも大きな杖だ。触つてみるとずっしりと重く、温かな木の感触に比べてとても硬い。これならば、ちょっとやそつとで折れることはなさそうだった。

「ちよつと重いけど、なんとかかなりそう。ありがとう、スライム君！」

「どういたしまして。きをつけてね。あいつら、きつとまたおそつてくるだろうから。しょくにんさんによろしくね」

ぴよんぴよん跳ねながらスライムが別れの挨拶をする。洞窟に入ってから以来の満面の笑顔で手を振りながら、アランはその場を後にした。

12・負けないよ！

地面を荒く削ってできた階段を下りる。「こほん」とアランは軽く咳をした。

何やら砂埃が舞っている。壁に備え付けられた松明の光に照らされ、細かな粒がきらきらと舞っていた。

奥で声がする。呻き声のようだ。

『かしの杖』を抱えながらアランは走った。折れ曲がった道の先は広場になっていた。天井は高く、時折細かな砂が落ちる。漂っていた砂埃の正体はこれだったのだ。

その真下、ちょうど広場の中央に、大きな岩が転がっていた。呻き声はその下から聞こえてくる。

「おーい、おーい」

「だ、だいじょうぶ？」

「おおつ。助けに来てくれたのか！」

アランが駆けつけると、岩の下で横たわっていた男が歓声を上げた。初めアランは、男の下半身が丸々下敷きになっていると思い顔を青くしたが、男はあっけらかんとした表情で言った。

「帰ろうとしたら上から岩が降ってきてなあ。ご覧の通りの有様で動けなくなっていたんだ。ああいや、心配するな。わしがはまったのはちょうど窪みになったところ。運良くぺしゃんこにならずに済んでるよ。ただ抜け出そうとして腹がつかえてしまっただけなあ」

「えつと。お薬を作っているしょくにんさん？」

「いかにも。まさかお前さんのような小さな子が来てくれるとは思わなかった。勇気のある子じゃ」

下敷きになったひげもじやの男に言われ、アランは苦笑しながら頬をかいた。

男は逞しい腕を伸ばし、下から岩を押し上げる仕草をした。

「お前さん、ちょっと手伝ってくれんか？ もう少しでどかせそうなんだ」

見ると、少しだけ岩が浮いている。地面の凹凸を利用すれば、確かに転がしてどかせることができそうだ。アランは言われたとおり、に岩に手をかけた。

「いいか？ いちにのさん、で行くぞ。それ、いち、にの」
「さんっ！」

渾身の力を込める。ぐら、と岩が傾いたかと思うと、次の瞬間には大きな音を立てて岩は転がった。「ふいー、助かったわい」と言いながら男が立ち上がる。

「ありがとう、礼を言うよ。ずいぶん力持ちなんだなあ」

「ううん。そんなことないよ。おじさんが力持ちなんだ」

「はっはっは。……おっと、こうしちゃいられない。急いで帰らなければ。ではな、坊主！ お前も早く戻るんだぞ！」

「あっ、おじさん！」

言うが早い、男はあっという間に走り去っていった。小太りな体型に似合わない俊敏な動きだった。あれでどうして岩の下敷きになったのか、もしかしたら結構どじな人なのかもしれない。

くすり、とアランが笑ったときである。

「うわああっ」という男の悲鳴が洞窟内に響き渡った。アランは『かしの杖』を握り、慌てて駆け出した。

階段のふもとで男が立ち止まっている。彼の前に立ち塞がっていたのは――

「おおきづち……」

顔を強ばらせるアラン。

武器である大きな木槌を振り回しているのは、まさしくおおきづちだった。

がつんつ、と威嚇するように地面を叩く。相変わらずの力だった。しかも一匹ではない。三匹。上へ登る階段を塞ぐように立ってい

る。

「こりゃあ……まいったな。さすがに今のわしでは三匹同時は……」
「さがって、おじさん」

決意の表情でアランが前に出る。男は驚きの声を上げた。

「まさか、戦うつもりか？」

「うん。この子の仲間とは一度、戦っているんだ。……まけちゃったけど」

「それなのに戦うつもりなのかい、坊主!？」

「うん。だって、にげてばかりじゃ、お父さんをっかりさせちゃうから。それにおじさんも守らないとね」

アランは身長よりも大きな『かしの杖』をおおきづちに向けた。

「……今度こそ、まけないよ!」

おおきづちがいきり立ったように襲いかかってきた。

13・父の言葉

飛び上がった一匹を追いかけるように、残りの二匹のおおきづちもまっすぐアランに突進してくる。

統制が取れた——というより、我慢できずに各々が勝手に飛びかかってきたという感じだ。アランは横っ飛びにかわした。勢い余ったおおきづちたちはたたらを踏む。

アランは力強く踏み込んだ。全身を使って、手にした『かしの杖』を振り回す。

ぴりっ、と脇腹が痛んだ。

「くうっ！」

それでも武器を手放さず、アランは振り抜いた。

空気を押しのけ、硬い杖の先端がおおきづちの身体を打ち据える。鈍い音が響き、おおきづちが吹き飛んだ。他の一匹を巻き添えにして、壁に叩き付けられる。

「坊主、危ないっ」

職人の男が声を上げる。無事な一匹が横合いから木槌を振りかぶっていた。

『かしの杖』はアランの身体よりも大きく、重い。一度大振りしてしまうと構え直すのに時間がかかる。その隙を突かれた。

嫌な記憶がアランの頭をよぎる。あれを頭に受けたら——と考え、身体が一瞬固くなる。

アランは叫んだ。自らを鼓舞し、無我夢中で『かしの杖』をそのまま振り回し続けた。先端で円を描き、踏み込むと同時に真上から打ち下ろす。

木槌と真正面からぶつかり——そのままはじき飛ばす。

『かしの杖』はおおきづちの頭頂部を直撃した。鈍い感触が両手

に広がる。

おおきづちは倒れたまま動かない。もしかしたら隙を見て立ち上がってくるのでは、とアランは思ったが、すぐにおおきづちの身体は粒子となって消えていった。

全身の力が抜ける。直後、思い出した。

「そうだ、あといつぴき！」

慌てて武器を構え直そうとするが、気が緩んでしまったのか全身に力が入らなかった。

早く、早く——自らを急かしながら、何とか杖を持ち上げる。顔を上げた。

おおきづちの姿はどこにもなかった。

「……あれ？」

「逃げたよ。ついさっきな」

安心したような、呆れたような声を出し、職人の男がアランに声をかけてきた。

「それにしても見事だったぞ、坊主！ まさかその年で、おおきづち三匹を退けるとはお！」

「……うん。僕もちよつと信じられないかも。あ、そうだ！ おじさん、ケガはない？」

「おお。お前さんのおかげでぴんぴんしとるわ。世話をかけたの」「よかった……」

息をつく。すると今度こそ脱力で立っていられなくなった。尻餅をつき、『かしの杖』を落とす。

男が手を差し伸べてくれた。

「よく頑張ったな。ここから先はわしに任せろ」

「え？」

「子どもひとりにいい格好ばかりさせられん。出口まで送っていくよ。それに……ほれ。なかなか言えんじやろ。岩の下敷きになって子どもに助けられ、道中もその子に送ってもらいました、なんて」

「……ぶっ」

思わずアランは吹き出す。男はひげもじやの顔に苦笑を浮かべた。
「よし、それ」

男はかけ声とともにアランを背負う。アランはびっくりしながらも、かつてパパスに肩車してもらったときのことを思い出して嬉しくなった。

「モンスターから逃げ出したこと、これでお父さん許してくれるかな」

「はて。お前さんの父親は」

「パパスって言うんだ。とてもつよいんだよ」

「パパス……おおっ！？ 坊主、あのパパス殿の息子さんかい！？ いや、どうりで強いわけだ！」

「えへへ」

アランは頬をかいだ。しみじみと男は言う。

「えして立派な親を持った子はどこか難しいところを心に抱え込んでいるものじゃが、お前さんは違うようじゃな。心配せんでもええ。パパス殿ならきつと許してくれる。胸を張って、強く生きる事だ」

「うん」

「よし。いい子だ」

男は笑った。

——こうしてアランは初めてのひとり冒険を無事、乗り切ることができたのであった。

「聞いたぞ、アラン」

職人の男とともに無事、洞窟を抜けたその夜。

少し切れていた口の痛みを我慢しながら、夕食のスープを飲んでいたアランに、パパスが声をかけた。思わずびくり、とアランは身体を震わせる。

何となく、怒られると思ったのだ。

落ち着いて考えればちよつと無茶なことをしたかなと自分でも思う。それに、アランは一度モンスターの前から逃げ出してしまっていた。パパスにはそのことを伝えていない。何となく、後ろめたかったのだ。

恐る恐る顔を上げる。父の顔は怒ってはいなかった。いつもの精悍な顔に、どことなく呆れたような表情を浮かべていた。

「親父さんから聞いたぞ。ひとりで洞窟の奥まで入っていったそうじゃないか」

「ご、ごめんなさいっ」

思わず頭を下げる。するとパパスは「ふっ」と笑った。

「まあ、無事に帰ってきたのだ。よくやったな」

「え？」

呆然とするアラン。サンチョが困惑の声を上げた。

「しかし旦那様、私は気が気じゃありませんでしたよ……。お昼になつても坊ちゃんは帰ってきませんし、帰ってきたら帰ってきたで怪我をされていたじゃありませんか。もう私は心配で」

「はっはっは。相変わらずお前は心配性だな。あの洞窟はモンスターこそ出るが、村人も入る整備された場所だ。確かにひとりきりで入ったのは感心せんが……。何事も経験だ」

「はあ……。さようでございますか」

「そうとも」

「あ、あの。お父さん」

アランの呼びかけにパパスが振り返る。しばらくうつむいてもじもじと手を合わせていたアランは、意を決して告げた。

「僕……モンスターからにげちゃった。こわくなって、痛くて……。お父さんなら絶対ににげないはずなのに。僕、お父さんのことにもなのに」

「それは本当か、アラン？」

「……うん」

「そうか」

深くうなづくパパス。今度こそ、アランは叱責を覚悟した。

「それはますます、お前のことを見直さなければならぬ。アラン」

「……？」

「人間、誰しも怖くなるときがある。強大なモンスターの前には敗れ去ることもあるだろう。そんなとき大切なのは、命を粗末にしないことだ」

「それって」

「逃げたことを気にしているのなら、それは筋違いということだ、アラン。時には逃げて、自分の身を守る必要もある。生きていれば再戦の機会もあるだろう。それがさらなる成長へと繋がることもある。だが死んでしまつては、元も子もないのだ」

「お父さん……」

「大切なのは生き残ること、生き残る意志を持つことだ。……しかし」

そこでふと、パパスは遠い目をした。

「時には、たとえ命を捨てることになろうとも戦わなければならぬときがある」

「旦那様……」

何かに思い至ったのか、サンチヨの声が沈んだ。

パパスがスプーンを置いた。真っ直ぐにアランを見つめる。

「アランよ」

「はい」

「逃げるなどと言わない。だが自分が何のために戦っているのか、何のために生きようとしているのか、それは忘れてはならぬ」

「……」

アランは目を伏せた。父には申し訳ないが、アランには難しすぎる内容だった。ただ、自分のしたことが間違っていなかったということだけは、何となく理解することができた。神妙にうなづく。

パパスが破顔一笑した。

「そろそろ、お前にも剣の稽古をつけなければならないな。まだ小さいと思っていたのに、月日が経つのは早いものだ。まあ、しばらくは子ども用のナイフからだが」

「お、お父さんっ」

「はっはっは」

頬を膨らませるアランの前で、パパスは気持ちよさそうに笑っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7449x/>

ドラゴンクエスト? ~ 天空の花嫁 ~

2011年10月26日07時09分発行